【児童生徒の輝く心育成事業～ふれあい応援プロジェクト～】

赤ちゃんとのふれあい体験活動

山口市立宮野中学校

学　校　の　概　要

①　学校の概要

○　学級数：１３学級
○　生徒数：３５３人
○　教職員数：３１人
○　活動の対象学年：２年・１２２人

②　体験活動の観点からみた学校環境

○　本校は、山口市の中心地より北東に位置し、周囲はすぐ近くまで山に囲まれ、水田を作っている農家も多く、自然の豊かさを感じさせる地域である。しかし、日常生活の中で自然や地域の人々とふれあう機会や経験は､少ない。

○　宮野地区は中心地に隣接した新興住宅地となっているため､核家族が多く、地域と学校との結びつきが希薄な面が感じられ、学校の様子が地域に伝わっていない面もある。

③　連絡先

〒７５３－００２１
山口市桜畠４丁目９－１
電　話：０８３－９２８－０１４４
ＦＡＸ：０８３－９２８－０５９７
電子メール：miya-jhs@c-able.ne.jp

体　験　活　動　の　概　要

①　活動のねらい

○　地域のお母さん方と乳幼児との交流体験や専門家からの直接の指導を通して、生きていることに感謝し、自他の命を大切にしようとする気持ちを育てる。

○　職場での勤労体験を通して、働くことの厳しさや喜びに触れ、社会の仕組みやマナーについて学び、自分の将来について真剣に考えさせる。

②　活動内容と教育課程上の位置付け

○　保健師による指導
家庭科　　２時間

○　赤ちゃんとのふれあい体験学習
「赤ちゃんと遊ぼう、赤ちゃんに学ぼう」
ふれあい体験　総合的学習の時間　１８時間

○　助産師による「命の大切さについて」の授業
保健体育　　２時間
総合的な学習の時間　４時間

○　大学生によるピア・カウンセリング
全校　学校行事（文化祭）　２時間

○　命の大切さを学ぶ講演会
保健体育　　２時間
道徳　　２時間

○　職場体験学習
総合的な学習の時間　１８時間

1　活動に関する学校の全体計画

○　活動のねらい

・　地域の子育てネットワークのお母さん方の協力を元に、２回（６月、１２月）のふれあい体験の中で赤ちゃんの半年間の成長や発達の早さを知り、お母さん方の出産や子育て話を聞いたり、我が子への愛情のこもった接し方を傍らで見たりすることにより、命のつながりや命の大切さを学ばせたい。

・　自分も愛情をもって育ててもらったことを知ることで、自尊感情を高め、親や周囲の人たちへの感謝の気持ちをもたせたい。

・　専門家から、中学生の身体と心の成長を学ぶことで、自分の成長を客観的に見ることができるようになり、正しい情報をもとに、正しい判断力を身に付けさせたい。

○　全体の活動計画

活動の内容	単位時数	時期と位置付け
事前学習として、助産師から乳幼児の成長と発達の講義を受け、赤ちゃんの抱き方とオムツ交換の実技指導を受ける。	２時間	６月　家庭科
赤ちゃんとのふれあい体験活動	６時間	６月　総合
職場体験学習	１８時間	７月　総合
助産師による講演　「思春期のからだと向き合おう」	２時間	９月保健体育
県立大学生によるピア・カウンセリング 「大学生と一緒にからだのクイズに挑戦しよう」	２時間	１０月学校行事 （文化祭）
赤ちゃんとのふれあい体験活動	６時間	１１月　総合
助産師による命の学習　「思春期の心と向き合おう」 助産師による命の学習　「今、あなたたちに伝えたいこと」	２時間 ２時間	１２月　総合 １２月　総合
村瀬幸浩氏講演 「思春期を生きると言うこと」私もあなたも大切	２時間	２月保健体育
森　美加さん講演　「命について考える」	２時間	２月　道徳

※上記の中から２つを取り上げて次に報告する。

２　活動の実際

(1) 赤ちゃんとのふれあい体験活動

登録したお母親６２人　　乳幼児７５人（６ヶ月～４歳）

○　事前指導

昨年度の体験活動で、初めて赤ちゃんを抱いた生徒は全体の２割ほどにのぼった。今年度は、市の保健師と地域の母子推進委員の協力を得て、沐浴人形を使った事前学習を取り入れたことで、生徒の不安感を取り除くことができた。また、単なるふれあい活動にしないために、事前学習では、赤ちゃんに接する時のマナー、距離を縮めるための声かけの工夫や、お母さんに出産や子育ての思いを話してもらう質問内容をグループ毎に話し合った。

○　活動の展開（ふれあい体験学習の活動の流れ）

・　体育館に８枚のマットを敷き、８グループに別れて活動する。２回とも生徒と親子は同じ　班分けとする。

・　参加者の緊張感をほぐすために、音楽をかけ簡単な手遊び歌をして身体と気持ちをほぐす。

・　班長が司会進行をし、自己紹介をしながら赤ちゃん、お母さん、生徒の名札を作る。

・　１回目はほとんどの班が出産や子育ての質問をしていたが、２回目は６ヶ月間の成長ぶりや、子育ての中で危険に感じたことなど、質問も班ごとに変わってきていた。

・　質問の後は、生徒が準備した赤ちゃんが喜びそうなおもちゃや、風船、新聞紙、ボールなどを利用しながら遊びを工夫する。（２回目の時は、同じ班の赤ちゃんのために一人ひとつずつおもちゃを作った。）

・　班ごとに、班長がお礼の挨拶を述べて終了する。

○　事後指導

２回の体験活動を通じて命の繋がりを感じることができたか、人とかかわる中で自分な

りの表現をすることができたかなど、アンケートや感想を書く中で学びをふりかえった。お母さん、赤ちゃんそれぞれにお礼の手紙を書き郵送した。

また、活動の感想をまとめ、学校便り、学級通信や保健便りに掲載することにより、互いの考えを知り、保護者にも生徒の活動を理解してもらっている。参加されたお母さん方にも、「ふれあい通信」を発行し、生徒感想や他の参加者がどのような意義を感じて参加されたかを知ってもらうものになった。

(2) 助産師による、命の大切さについての授業

○　事前指導

昨年度は、保健の授業として助産師に話をしてもらったが、生徒の感想を読むと内容が少し難しかったことがうかがえた。そこで、今年度は教科担任の授業の後に実施することや、内容の精選や、エピソードを増やしてもらうようにした。

○　活動の展開

「上級思春期相談士」の資格を持つ助産師に、各学年の発達段階を踏まえた指導をしていただいた。また、助産師という立場から、命の尊さと誰もが望まれて生まれてきたことを現場のエピソードを交えて話をしてもらい、生徒は性が自分の一生に関わる問題であること、命に関わる問題であることを理解することができた。

○　事後指導

生徒の感想はテーマを設定して、これまでの自分の生活体験や考え方などを、総合的にとらえる中で、テーマに対する自分なりの考えを書く方法をとった。

３　体験活動の実施体制

(1) 学校支援委員会

大学教授、助産師、保健師、子育てサークルの代表、小学校校長、小学校教頭、教育委員会担当者、校長、教頭、研修主任、家庭科教諭、生徒指導、養護教諭のメンバーで構成した。

○　配慮事項等

乳幼児が学校を訪れるため、お母さん方に安心して来校してもらえるような、案内状の準備を行い、活動の理解を求めた。また、質問の内容についても、事前に参加する方にお知らせしておいた。参加する親子に保険をかけ、安全面を含めた配慮をした。

４　活動の評価工夫と指導の改善

(1) 最初と半年後ではどうのように自分の意識や気持ちが変化したか、評価をさせた。

(2) 協力を得たお母さん方にも評価をもらい、来年度に向けた活動の改善点が明確になった。

(3) 教科とのつながりについては、教科主任や教科担当と事前に相談しながら進めた。学習指導要領に示されている教科の目標と体験活動の内容を考慮しながら進めた。

５　活動の成果と課題

(1) 成果

○　**「ふれあい体験活動は今後も継続した方がよいと思いますか。」**

生徒	・・・継続した方がよい８８％	分からない９％	続けない方がよい２％
参加したお母さん・・	〃　９０％	〃　３％	〃　０％

生徒の中には、「継続するのなら、２回目の方が積極的に関われるので、２回実施した方が良い」や、「末っ子や、一人っ子には良い刺激になった」と言う意見があった。

○　「ふれあい体験学習で印象に残ったことは何ですか。」

生徒の回答（３つ選ぶ）		参加したお母さんの回答（３つ選ぶ）	
①自分が優しい気持ちになれた	５５人	①中学生が優しさや思いやりを持って接してくれた	２２人
②お母さんたちの子育ての大変さが分かった	５０人	②我が子が中学生になった時の様子が想像できた	１６人
③子どもとの接し方や遊び方が分かった	４６人	③予想したより中学生が礼儀正しかった	１４人
④６ヶ月の赤ちゃんの成長ぶり	４５人	④子育てをする親として中学生に協力できた	１１人
⑤自分もこんなに大切に育てられていたこと	２４人	⑤異年齢で交流することの必要性を感じた	１０人
⑥自分の作ったおもちゃを喜んでくれた	２０人	⑥子育ての話を中学生にできた	７人
⑦幼いもの、弱いものの、命の大切さ	２０人	⑦生徒の半年間の成長ぶり	４人
⑧赤ちゃんが身近な存在になった	１３人	⑧開かれた学校であると感じた	３人
⑨出産や、子育ての話を聞くことができた	１０人	⑨子育ての大変さを中学生に分かってもらったこと	２人
⑩自分の親に感謝の気持ちを持つようになった	９人	⑩その他（おもちゃを手作りしてくれたこと）	４人

アンケートの結果からも分かるように、生徒も参加したお母さん方も、ふれあい体験活動の意義を感じている。幼い命との交流の中で、生徒はこれまで感じたことの無かった慈しみの感情や忘れていた親への感情など多くのことを味わうと共に、子どもの発達のすじみちや発達を支えるかかわり方などについて、学ぶことができた。また、目の前にいる乳幼児の姿と、助産師が話す出産までの期待と緊張感が重ね合わさり、生徒一人一人が命の尊さを肌で感じることができた活動であった。

(2) 課題

本校の活動は２年目を迎え、来年度以降も活動を継続していきたい。今後の課題として、１回目のふれあい体験活動が終わってすぐ、生徒同士による反省会を取り入れる必要がある。体験活動の目標を達成できたかをふり返り、２回目の活動では生徒各自がより主体的に関われるように意見を出し合う場にしたい。

また、参加されたお母さん方の、中学生の役に立ちたいという気持ちが強いので、生徒がそのことを汲み取り、お母さんへのかかわり方を変えていく必要がある。

当初、６ヶ月間あけて成長の様子を見るようにしていたが、１１月下旬は寒いので時期にこだわらず早い時期にした方がよいと思われる。

今後も、人とのかかわりを大切にする実践に取り組んでいき、本校が目指している表現力やコミュニケーション能力をより高めることができるような活動を創っていきたい。